

インドネシアにおける教育の現状と課題

前在インドネシア日本国大使館付属バンドン日本人学校 校長
北海道北見市立常呂小学校 校長 櫻田 弘道

キーワード：インドネシア、教育制度、現地校交流、聞き取り調査

1. はじめに

インドネシアは発展途上にあり、急速に社会の状況は変化している。しかし、国民の格差は依然として大きく、2億5千万人ともいわれる人口世界第4位のこの国がどのような教育制度の中で人を育てているのかについて、現地校の視察及び交流活動・聞き取り調査をもとに考察する。

2. インドネシアの概要

インドネシアは、1万3千以上の島々が、東西5110km、南北1900kmの広大な国土に存在する、世界最大の群島国家である。また、約300もの民族が暮らしている多民族国家でもある。人口は現在2億4000万人以上で世界第4位。又、宗教はイスラム教が90%を超え、世界最大のイスラム教人口を誇る国であるが、キリスト教、仏教、ヒンズー教など信教の自由を認め多様性を大切にしている。

3. インドネシア教育の概要

教育体系は、国家教育省が管理する一般の学校～スコラと、宗教省の管轄となるイスラム系の学校～マドラサ、プサントレンがある。いずれも小学校・中学校・高校・(大学)の6・3・3・4制であり、このうち小中学校の9年間については義務教育である。スコラでもマドラサ、プサントレンでも、一般科目と宗教科目を履修することとなっているが、マドラサ、プサントレンは特に宗教を重視した教育を行い、小・中学校から全寮制のところも多い。就学率は小学校約93%に対し、中学校は約80%であり、特に地方ではまだまだ低い現状である。



現地校の授業の様子

また、大都会であるジャカルタ特別州は義務教育を高校を含めた12年に延長し、公立高校の授業料を無料化を目指しているが、現在まではまだ達成できていない。

公立学校は、小学校がSD (Sekolah Dasar)、中学校がSMP (Sekolah Menengah Pertama)、高等学校がSMA (Sekolah Menengah Atas) と呼ばれ、小学校では一般的な教科を学習するが、中学校ではそれに加え、技術や工業、農業などの実技の習得が多くなる。学習言語はインドネシア語だが、第二言語として34州の各地の言語と英語も学ぶことが多い。近年、高校での第二言語で日本語を学ぶ生徒が増えてきている。(個人が、例えば英語と日本語などから選択する)

インドネシアには、「パンチャ・シラ」という国の五原則がある。これは、国家と国民の基本理念(国是)で、①神への信仰 ②民族主義 ③民主主義 ④人道主義 ⑤社会正義、を小学校から大学まで一貫して教育が行われる。全ての国民はこの国是に従って、宗教、道徳、礼節等の情操教育を学び実践することが求められている。また、インドネシアには「多様性の中の統一」という国家標語がある。インドネシアは多民族、多言語のためにコミュニケーションが非常に難しく、そのため、共通語としてインドネシア語を大切にし、また、少数派の宗教も認めるなど、多様性を重視している。

4. インドネシア教育の現状

上記にもあるが、学校教育制度は、「6. 3. 3. 4 制」である。義務教育は小学校1年生～中学校3年生。年齢で言えば7歳から15歳まで。その上に高等学校3年間、大学4年間がある。小中学校は2部制が多く、午前に学ぶ子と午後に学ぶ子に分かれる。小学校・中学校の卒業時に全国统一内容の国家試験があり、10段階評価がされ基準に満たなければ卒業できない。また、この結果により進学できる学校が決められる。

就学率は、国家教育省資料（2012年→2015年）によると

- ・小学校：97.96%→93.53% ・中学校：86.11%→80.76%
- ・高等学校：55.83%→57.25% （大学：13.67%（2012年統計のみ）となっている。

※どうして小中学校の3年後に就学率が下がるかわからないが、「まだ統計を取る仕組みが十分にできておらず、正確な数字がわからない」ということが考えられる。

授業料は、

- 公立学校（例）
- ・小学校・中学校～入学料、授業料共に無料
 - ※しかし、行政の予算、学校、保護者の経済状態により負担がある。
 - ・高等学校～入学料：±45000円～±180000円
 - 授業料：±4500円～±13500円/月

- 私立学校（例）
- ・小学校～入学料：±45000円～450000円
 - 授業料：±2700円～±45000円/月
 - ・中学校～入学料：±126000円～±540000円
 - 授業料：±3600円～45000円/月
 - ・高等学校～入学料：±270000円
 - 授業料：±4500円～±72000円/月

※インドネシア通貨はRp（ルピア）だが、わかりやすいように円に置き換え記載している（1円=Rp120として）。以下同様。

5. 現地校視察から

学校名 ステアブディ校（SDN SETIABUDHI）

※以前はSDPNだったが、今はP（「試し」の意味）が省略されSDNとなった。SDは小学校、Nは国立。

(1) ステアブディ校の特徴

- 20年以上にわたり本校と交流活動（児童生徒の交流及び職員研修）を行ってきた。
- 政府が管理し、新しい教育を試験的に実践している。日本における付属校のような学校。
以前は政府本部が管理していたが、今は地域（西ジャワ州）の政府が管理している。
- 現在は、教科書を使わずテーマをもとに議論探求していく授業に取り組んでいる。（2013カリキュラム）
- 学校の教育内容について保護者と話し合いを持っている。これは西ジャワ州では初。
- 児童数 約600名（インドネシアとしては中規模）
- 教員数 30名以上
 - ・校長1名、副校長3名、以下主任、担任としっかりとした組織。教員は公務員となり、大変狭き門といわれる。
- 入学の要件 年齢と住んでいる地域によって入学。登下校は基本的に親の送迎。
- 制服は曜日によって色や仕様が異なる。（月は白、火は赤と白、水はスダの伝統的な服など）

○入学科、授業料ともに無料。(良い教育が行われ大変人気のある学校)

○卒業後は、多くが国立の中学校へ進学。

(2) 5つの教育方針

①国民性の尊重→月曜日に儀式が行われている。

②学力向上→先進的な教育の実践から子どもを育てる。

③宗教の尊重→イスラム教の教えを大切にし、金曜日に全員でお祈りをしている。

④地域性の尊重→水曜日にスダの服を着て、スダ語で過ごす。(バンドンはスダ族の地域)

⑤環境教育の実践→週3回、ごみを拾う活動を行っている。インドネシアではめずらしい実践。

(3) 視察及び研修を通して

ステアブディ校とは3年間継続して交流してきたが、学校が積極的に新しいことを取り入れ、行くたびに变化しているように感じられる。

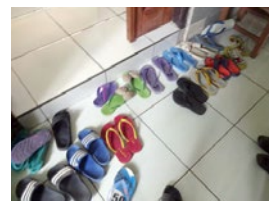
①授業の質の改善

課題解決型の学習、具体物を使ってのわかりやすい指導、練習問題による定着度の確認など大変勉強になる授業であった。また、教室掲示物も年々工夫されているように感じた。

②靴を脱いで教室に入る取り組み

担任の考えで行っている実践だが、ねらいを聞くと、i 整理整頓の意識を高めるため。ii 教室をきれいに使うため。iii 気持ちを切り替えて学習するため、と説明を受けた。

インドネシアでは、脱いだ靴をそろえる習慣がなく、これほど靴をそろえて脱がれているのを見たことがない。



そろえられた靴

③日本及び他国の教育への関心

指導にあたっていた教員(教頭)は日本の教育に高い関心があり、自分の学級経営に生かしたいと取り組んでいた。挨拶指導や授業の進め方、学級掲示など、その意図ははっきりと見て取れた。記念品に算数セットをプレゼントしたが、日本の工夫された教材に大変驚き喜んでもらった。

④その他

授業の準備は放課後に行っている。多くの公立学校は午前午後の2部制で教員は忙しいが、この学校は1部制のため放課後に授業づくりに取り組める。

(4) 今後期待したいこと

①教育課程の整備

形式的にはカリキュラムがあり、教科書もある。しかし、実際にはそのことが十分に機能しているとは言えない。インドネシア全体に言えることだが、上の者が決定し下に降りてくる際、その意図やねらいが十分に説明されず、また現場に即さない計画であるなど、混乱が見られる。先進国に追いつけ追い越せの気持ちで取り組んでいるのは感じられるが、より実態に即した教育を進めていくことが今後必要なのではないかと考える。

②学習習慣の定着

授業からは、その国の様々な姿が見えてくる。例えば、子どもたちの人の話を聞く姿勢や、教師がすべての子に理解させようという気持ちなどは日本とは異なる。人口の多いインドネシアなので一人ひとりにまで十分に目が行き届かない状況もあるのかもしれないが、かなりの子が学習内容を十分に理解しないまま先に進んでしまっているように感じた。その中から伸びていく子がチャンスをつかんでいくという厳しさが、格差をより大きくしているとも思われるし、半面、そこを勝ち抜いた少数がリーダーとなり、インドネシアの今後を切り

開いていくのかとも思った。それを意図的に行っているのか、仕方がなく行われているのかはわからないが、やはりすべての子の学力を上げることが今後必要なのではと感じた。(それでも、この学校に通う子たちは恵まれており、街のあちこちには満足な教育を受けられず路上で小銭を稼ぐ生活を送っている子も多くみられるのがインドネシアの現状である。) この格差増大の傾向は日本の教育にも言え、インドネシア同様、課題に感じる。

6. インドネシアの生活と教育にかかわる課題～聞き取り調査から

インドネシアは日本以上に生活に格差がある。一概にはいえないが、平均的な4人家族で1カ月に必要な生活費は最低約4.5万円と言われる。(※バンドンの場合。大都会のジャカルタはより高く、地方にいくとより安い地域差が大きい) 公立学校の教員や銀行員は割合賃金が高く、月約3万円(30歳くらい)の収入がある。また、スーパーの店員やタクシー運転手などは賃金が安く1万3千円から1万8千円程度。つまり、平均的な4人家族が暮らす最低費用4.5万円は、共稼ぎでようやくまかなえる状況である。教育費は通う学校によって大きな違いがあるが、大学だと最低、年18万円程度の授業料が必要であり、その他様々な費用も必要となる。ただ、お金がないからといって進学できないわけではない。補助金の制度があり、意欲と学力、そして家族の理解があれば大学までも進学できる。就職先には、例えば最低でも専門学校(3年)を出ていることが条件であるところもあり、よい仕事に就くために高い学歴を求める家庭も多い。しかし、兄弟が多いなど、家庭の事情、お金の問題で進学をあきらめることも現実には見られるようである。また、進級・進学をお金で解決するという。就職についても能力や資格によって決められるのではなく、コネやお金で決められる状況があり、結果優秀であっても収入はそれに見合うものでなく、日本の1/10以下しか得られない状況が多々ある。この安い賃金は、実は本校で勤務する幼稚園教諭、事務職員にも当てはまる。インドネシア教育大学(国立)を出て教員の資格を持ち、日本語、英語、インドネシア語をかなりのレベルで話し、事務能力、人柄も優れたすばらしい人材にもかかわらず、月2.7~4.5万円で働いてもらっている。より多く賃金を支払いたい気持ちはあるのだが、学校の財政状況、また、国全体の状況から、今の賃金を理解してもらっている。

格差は、富が一部に集中している社会構造に起因していると思われるが、今後、教育の機会均等、及び能力に応じた賃金形態が進むことが、この国の発展にとって重要なのではないか。

7. おわりに

インドネシアの魅力は、上記のような格差があるにも関わらず、人々が明るく、前向きに暮らす姿にある。暮らし始めた頃は、日本との違いを遅れた文化と見てしまいがちだったが、それは短絡的で間違った考えであった。例えば、「幸せか?」という調査をすれば、インドネシアは日本以上に幸せに感じている人が多いのではないか。もちろん、お金は大切である。しかし、インドネシアの人たちは、それ以上に大切なものがたくさんあることを知っている。おそらく宗教や歴史・文化に起因するものと思われるが、そういう価値観が人々の根底にしっかりと根付いている。

3年間、この国で暮らしインドネシアの価値観や人間性に触れる中で、日本ではわからなかった大切なことに気付くことができた。このインドネシアでの経験を、今後の教育活動に生かし日本の子どもたちの未来に役立てて行くとともに、この国が今後ますます発展し、両国がより強い絆で結ばれていくことを強く願っている。